

藤島武二の「朝鮮」表象

九州大学 金正善

日本の近代美術を代表する洋画家藤島武二(1867-1942)に対して、近年「日本のオリエンタリスト」という新たな評価の枠組みが与えられている。本発表は、こうした新たな観点を踏まえつつ、「装飾画」の追求という藤島の画業の展開に、より積極的な意味を見出そうとする試みである。

このオリエンタリズムと藤島との関わりは、主に1913年11月25日から約一ヶ月間朝鮮に滞在した藤島が、翌年3月の『美術新報』に掲載した「朝鮮観光所感」という文章によって、確かなものとして受け入れられてきた。実際、「朝鮮観光所感」は、フランスのアルジェリア征服を背景とするオリエンタリズム絵画について言及しており、藤島が「植民地を描く」に当たって、西洋のオリエンタリズム絵画をその手本として意識したことは明らかだろう。さらに、「朝鮮観光所感」からは、朝鮮の服装に古代の面影をみるなど、西洋オリエンタリズムの画家たちがオリエントを、古代以来不変なままに存続する「永遠なるオリエント」「失われた過去」として描き出すのと同様の文脈が読みとれる。

特に、この日本の「失われた過去」を「永遠なる」朝鮮の中に見出そうとする表象の仕方は、文章の上だけではなく、「朝鮮連作」ともいえるこの時期の作品からも抽出できる。例えば、《朝鮮婦人》(1914年作)には、朝鮮の伝統服には見られないいくつかの要素が窺える。まずショールのような細長い布が肩から垂れられていること、第二にスカートの右下を塗り直し細長くしていること、第三に上着の結び目をなくしていることなどである。このような現実の忠実な再現とは言い難いモチーフの選択や変換は、藤島が当時の朝鮮の服装に古代の面影を重ね合わせようとしたことを示すものである。

こうして見ると、藤島が朝鮮を、西洋オリエンタリズム絵画に匹敵するものとして描き出そうとしたという近年の評価は、文章の上でも、作品の上でも確かなもののように思われる。だが、実はこのオリエンタリズム的視線こそが、藤島のいう「装飾画」、すなわち「総合的でかつ主観的、夢幻的の傾向をおびている」絵画につながるものであったと発表者は考える。それは、オリエントを「失われた過去」という、非現実的で、かつ幻想的なものとして表象するオリエンタリズム絵画の一つの態度が、朝鮮を併合以後次第に変貌していく姿ではなく、あくまでも主観的、夢幻的なものとして表現する藤島の「装飾画」に結びついていたからである。

さらに、この旅から画題を得た作品、《玉手箱》、《花籠》、《朝鮮婦人》には、藤島自らが「装飾画」と呼んだ《天平の面影》(1902年)、《朝顔》(1904年)、《蝶》(1904年)の画面構成や人物の配置などを、そのまま引き継ぐ傾向が見られる。この時期藤島は、「装飾画」の第一歩として制作した過去の自作を手本に、新たな「装飾画」を試みていたと考えられるのである。